

「わたしの家系を五代遡ると、弾直樹に辿り着きます」と、申し出られたI氏の連載を、期待を込め続けるつもりでいたが、昨年5月にお会いした以後、二回目の面談が実現されず、残念ながら立ち往生したままの状態である。何分にも定期行物、待つわけにもいかないので、好転するまで別な話題を取り上げ、連載を続けたいのでご了承いただきたい。

平成7年(1995)12月発行『かわとはきもの』No.94の「靴の歴史散歩」③⑨に、「…前略…明治10年代は、軍靴の試行錯誤の時代で、緊急時に暗闇でも履けるよう左右同形の軍靴なども造られたが、足を痛めるものが続出、結局失敗に終わったという笑えぬ挿話もある。甲革の銀面を内にし、肉側面のザラザラした方を外にしたのも、この頃のことである。

京都桃山の乃木神社に、乃木大将の履いた左右同形の靴があるというが、東京赤坂の乃木神社の話だけで、まだ実際には確認していない。京都に行った折にはぜひ見たいものと、楽しみにしている。」と、書いている。

平成20年(2008)12月11日、日頃からご指導をいただいている、日本はきもの研究会の会長 田口秀子先生から、以下のような懇切丁寧なお手紙と、数多くの検分写真が送られてきた。

「前略…先だって「はきもの研究会」の理事会で「乃木將軍の靴」の話が出まして、「かわとはきもの」に稲

川様が書いておられるのを拝見して「京都の乃木神社」にある左右が同じに造られた靴を見に、行って参りました。乃木神社の宝物館には、乃木希典將軍と静子夫人ゆかりのものが多数収蔵してありました。

その中から、左右が同じに造られた靴の写真を撮らせていただきましたので、ご参考までにお送りいたしました。

靴の製造について、私はあまり詳しくないのですが、長靴が2足と短靴が3足の計5足がありました。これらは、塚田清市氏の寄贈となっていますが、この方がどのような方かは聞きそびれました。

確かに左右が同じように造られています。履いているうちに左右が決まっていたようにも見受けられます。

いずれ3月にも京都に行くことがありますので、再度訪問したいと思っています。「はきもの研究会ニュース」にも載せるつもりですが、稲川様のご参考になれば幸いです。」

まことにありがたい情報である。



写真・田口秀子先生提供